

西村寿行

蒼茫の大地滅ぶ

下



蒼茫の大地滅ぶ

下

西村寿行

講談社

蒼茫の大地、滅ぶ (下)

定価 七五〇円

第1刷 昭和53年9月1日発行

第5刷 昭和54年11月22日発行

著者 西村寿行 (にしむら・じゅこう)

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話東京(03)945-1111(大代表)
振替東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© JUKO NISHIMURA 1978 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます

目次

第6章 蕭条の冬—— 5

第7章 流民—— 45

第8章 北に帰る—— 81

第9章 奥州国—— 122

第10章 渚—— 165

装 幀
本文イラスト
野中
金森
達 昇

蒼茫の大地、滅ぶ

下

第6章 蕭条の冬

1

秋がやってきた。

九月下旬は北国では秋たけなわといってもよい。例年なら、樹々の緑が褪せて、赤い水河に移り急ぎ、風が過ぎるとホロホロと葉が舞い落ちる。

風は冬の気配を含んでいた。

刑部保行が盛岡市を出発したのは、九月二十九日の早朝であった。

総勢千五百名の東北地方守備隊が刑部に率いられて、盛岡市を後にした。八十台の隊員輸送車が国道四号線を南下した。

刑部と香江はジープで先陣を切っていた。

ジープのすぐ後ろには東北地方守備隊の幹部の乗った輸送車がつづいている。

青森第一隊、岩手第二隊、秋田第三隊、宮城第四隊、

山形第五隊、福島第六隊の隊長と副隊長十二名が招集されていた。

国道四号線には自動車の姿がめつたにみられなかった。すでに東北六県の経済活動は麻痺していた。飛蝗来襲以前には国道四号線は巨大な長虫が蠕動するように、日夜、車を呑み込み、吐き出して、苦悶に似た活況を呈していた。

いまは、その活気はない。

動脈が断たれて、血液が送られてこなくなった血管に似ていた。

飛蝗群団は庄内平野を劫掠し尽して、いまは、本莊平野、横手盆地を席捲中であつた。その先陣は雄物川の河口に迫っていた。そこから秋田市を飛び越えれば、秋田平野だ。

東北六県の最後の牙城である秋田平野、八郎潟、能代平野が、死を迎えている。

タスク・フォース本部がコンピュータに計算させたその予測どおりに、ことは進んでいた。

いや、それを上回ってさえない。

コンピュータは一九七七年十月末の予測で、福島県は健在、秋田県一部健在を告げていた。

その時点で第一次産業の七十五パーセントが消え、二

次産業四十パーセント、三次産業六十パーセントが消えることあった。

が、実際には、崩壊の進行はスピードを増していた。

福島県が健在で秋田県の一部が健在なのはその通りだが、時期が一ヶ月早まっている。十月末の予測が、九月末にあらわれていた。

第一次産業の七十五パーセント、二次産業の四十パーセント、三次産業の六十パーセントが消えたということは、潰滅にひとしかった。

東北六県の大動脈である国道四号線から車が消えてしまったのは、とうぜんであった。

盛岡市から白河までは約三百キロある。

一日の行程であった。

国道が白っぽくつづいている。ジープを運転しながら、刑部は、なかば廃墟と化した青森市街地を思いだした。飛蝗群団が青森県を劫掠したあとは、急速に市街地は廃墟と化した。街からひとびとが消え、消えたあとのコンクリート街路に、雑草が伸びはじめた。

目を醒めるものがあつた。人間が住んでいる間は雑草がコンクリートやアスファルト舗装を突き破って芽を出すことはない。だが、ひとたび人間が去ると、それらは待ち構えていたように、コンクリートを突き破って芽を出

す。何年も何十年も、雑草はそのことのみを、人間の衰え去ることのみを、ひそかに待ち受けていたような感じがあつた。

小さな、たよりなげなたった一本の雑草の芽が分厚いコンクリートやアスファルトを逆摺鉢状に持ち上げ、まるで小さな噴火を起こしたようにそれを突き破って出ている姿は異様であつた。

力学的にもそれは想像のつかないエネルギーであつたが、刑部は雑草の力に科学を感じはしなかった。思うのは、怨念のような雑草の忍耐力と生命力であつた。

自然の草木も砂礫も、ほんとうは人間と訣別することのみを念じて長い年月を耐え忍んでいたような気がするのだった。

舗装道路をあちこちで割って市街地に繁りはじめた雑草は、飛蝗群団と一脈相通じていた感じがしないでもなかった。人間を追い払う戦いをはじめた気がしてならない。

白いアスファルトのどこまでもつづくこの無人に近い国道四号線も、やがて雑草の緑の群れに覆われる日が来るのではあるまいか。

その思いが、ふっと刑部をかすめた。

荒廃した国土がみえる。



その荒涼たる国道四号線を、後方補給部隊を従えた東北地方守備隊の精鋭千五百人が砂塵を捲いて南下している。

目指すは奥州白河の関である。

白河の関に何が待ち受けているのか、刑部にはわからない。香江にも、いや、だれにも、野上高明の胸中はわからない。

ただ、刑部は重い時の流れは感じとっていた。あらゆるものを包み込んで流れ行く大河の時である。逆らうことの不可能な大河が、いま東北六県を流れていた。

刑部には、その大河がみえない。

野上高明だけにみえる大河であった。

——透明な大河。

刑部は、そう思う。混乱の坩堝、潰滅前夜にある東北六県の街を、野を、山脈を、透明の大河が流れている。

透徹した目を持つ者のみがとらえ得る、時の大河であった。

車輛部隊は花巻市、北上市、水沢市、一関市と過ぎて、古川市も過ぎて仙台にかかっていた。

北上川流域に広がる広大な仙台平野には悪臭が充ちていた。飛蝗群団の残した糞と粘液の腐臭であった。

見渡すかぎりの沃野が、いまは、焼け野原に変わりは

てていた。

焼け野原に蕭条の冬の気配が、忍び寄っている。

2

九月二十八日。

国家安全保障会議が開かれた。

国家安全保障会議開催は首相の権限事項である。

第二次大戦敗戦後、歴代の首相で国家安全保障会議を

開いた者はいない。

駐倉首相は憲法上の規定にのっとり、はじめて、開

催に踏み切った。

秘密会議であった。

七人の男が首相官邸に招集された。

大迫法務大臣

吉兼国家公安委員長

浜村防衛厅长官

石根官房長官

東畑警察厅长官

曲垣幹事長

平田外務大臣

それに駐倉首相であった。

畦倉は憔悴^{しょうすい}の深い目で一同を見た。

「内閣調査室より報告があった」

畦倉は、そう切り出した。

「ご承知と思うが、いま、野上高明の周辺には諜報網が張りめぐらされている。内閣調査室と、それに属する陸幕二部。法務省所属の公安調査庁。警察庁公安部。それに陸上自衛隊調査隊——わが国の諜報組織というか、情報組織というか、ともかく全組織が、野上高明の動きを追っておる。その組織から、昨夜おそく、連絡がもたらされた」

畦倉は、ことばを切つて、指でコツ、コツとテーブルを叩いた。

「東北地方守備隊が動く」

「東北地方守備隊が……」

大迫法務大臣が受けた。

「さよう」

「どこへ？」

「奥州白河だ」

「……………」

「野上高明が指示した。千五百人近い守備隊が、明朝、盛岡市を出る。夕刻には白河に布陣する予定だ」

「理由は？」

太い声が訊いた。曲垣幹事長だった。

「叛逆だな」

畦倉は、無造作に答えた。

「叛逆……まさか」

「いや、国家叛逆だ。さもないければ、わたしは、国家完全保障会議を開いたりしません。野上高明は東北六県知事会を盛岡市に設け、その独裁者になった。その野上が、千五百名の守備隊に、東北六県とわが国との国境である奥州白河に展開を命じた……」

「首相」

曲垣は、畦倉をみた。太い猪首が据えられている。双眸に強い光が秘められていた。

「なぜ、そのような、異様なことばをつかう。わが国の国境とは、おだやかではない。あなたは、野上高明を敵視しすぎる。自ら描いた一枚の絵に潜むものに、溺れすぎている」

「わたしの描いた絵には、君にはみえない真実の姿が、塗り込められているのだ」

「わたしにみえない？」

「さよう。では、訊くが、野上の東北地方守備隊派遣の真意は、どこにあるのかな」

「……………」

「答えられまい」

激深い畦倉の双眸には、冷たく燃える炎があった。

「野上高明の真意は、即断はできない。しかし、わたしは、あなたの野上憎悪にも、また、真意を悟れない。あなたの胸中に、わたしは危険な炎をみる事ができる。

それが、怖い。東北地方は未曾有の動乱にある。われわれは東北六県を見捨てて、目を決議した。たったの六千億円を注ぎ込むだけで、目をつむろうとしている。それは、日本国を大恐慌から救うためにはやむを得ない措置だと、わたしも思う。どこにも財源がないのだから。しかし、あなたは時の首相として、東北六県を見捨てたことに罪悪感を抱いている。その罪悪感が、あなたの心を野上高明への憎悪に駆りたてているように見受けられる」

「待ちたまえ」

畦倉は、はげしい口調で遮った。

「わたしには、野上憎悪などは、ない。私情で政治をしているのではない」

畦倉は重大な情報を握っていた。その情報をもとに決断を迫られている。その決断の最大の障害は、曲垣であった。野上高明の盟友である曲垣が、畦倉には重苦しい。

「わたしは、国家公安委員会の勧告に基づいて、東北六県に緊急事態宣言を発する権限を、留保している。この国家安全保障会議招集も、このためのものだ。党幹事長として、きみは、党総裁であるわたしに従ってもらわねばならない。さもないと、この重大時局に、党を割る結果になる。最終的に、きみとの意見が合わねば、わたしは、あえて、党を割ろう。国家を救うためにはな。それが、首相に課せられた責務だ」

畦倉は、曲垣を凝視した。

「おだやかな発言ではないな」

曲垣の声は、固い。

「国家非常時の前には、ね」

畦倉の答えは、冷たかった。

「あなたは、幻影におびえているのではないのか。わたしには、あなたの描く幻影は、みえない」

牡牛のような曲垣の首に、不撓の力が入っていた。

「では、その幻影を、披露しよう」

畦倉は、ことばを切って、一同を見回した。

「去る八月十五日、アメリカ大統領補佐官のウィクター・ミッチェルが、メリーランド州アンドリュース空軍基地からどこかに向かって消息を絶ったと、UPIが小さく報じていた。諸君もご存じであろう。翌十六日、一

機の米空軍ジェット戦闘機が米本土からアラスカ経由で、三沢基地に飛来した。これは極秘情報だ。その機には、ウィクター・ミッチェルが乗っていた……」

「待った」曲垣が遮った。「なぜ、そのような重大な情報を、独り占めする」

曲垣の表情には強い不信が出ていた。

「わたしが情報を得たのは、昨日だった」

「……………」

「ウィクター・ミッチェルは同夜、ひそかに、野上高明と会談している」

「……………」

「帰国したミッチェルは、そくぎに大統領と会った。ホワイトハウスで密議がこらされたのだ。その席には國務長官および、CIA長官が同席した……」

「……………」

曲垣は黙っていた。

だれも、口を開かない。

「数日前に、大統領の肚が決まった。ウィクター・ミッチェルがCIA長官に、ある指令を出した」

「どのような指令かね」

曲垣の表情が青ざめていた。

「トップ・シークレットだ。CIAが行なう謀略のいち

ばん汚い部分だと、わたしには、それしかいえない」

「暗殺か……」

曲垣が、つぶやいた。声にかすかなわななきがあった。

「ウィクター・ミッチェルは、野上に対するに、硬軟両様の態度に出た。硬はCIAに発した指令だ。軟は、野上高明と交わした密約だ。ホワイトハウスは、野上高明に巨額の援助を約束した」

「巨額の援助……」

曲垣の声が重い。

「ただし、その援助は、現時点に行なわれるのではない。野上高明がある政治的立場に立ったときだ。その時点で、はたされる」

「……………」

曲垣は、黙った。

「わたしのいった、国家叛逆が、ご理解いただけたかね。動いているのはアメリカだけではない。ソビエト大使館が策動をはじめている。巨大な動乱がその気配をみせはじめているのだ。いまは、だれも、そのことに気づかない。飛蝗禍の陰に隠れている。ひとびとの目には、未曾有の経済危機しかみえない。だが、その危機の奥深くで、ひそかに地滑りを起こしつつあるものがある。巨

大な地滑りだ。あまりに巨大すぎて、だれの目にもみえない。しかし、確実に、大地は動いている。いや、時とすべきかな。時代が動いているというべきかもしれない。わたしには、それが感じられる。わたしは、飛蝗来襲後、間もなく、野上高明の背後に、その時の動く重い音を聴いたのだ」

「……………」

だれも、口を挟まなかった。

「時の動きは、いまは、まだ、昏迷の中にある。昏迷の中に大地はドロドロに溶けている。が、やがて、大地は固まり、昏迷は徐々に去る。そのときになって、われわれは大地の凝塊の中に異様なものをみるおそれがある。それは、建国以来、われわれが遭遇したことのない、醜いものだ。——わたしは、その醜いものに出遭いたくはない。怪物を育ててはいかんのだ。わたしは、政治は力だと思っている。首相に巨大な権限が与えられているのが、それだ。わたしは、動乱を抑える。悪い芽は双葉のうちに摘みとるのだ。それが、わたしに与えられた使命だ」

畦倉の口調に熱がこもっていた。

「どうしようと、いうのかね」

曲垣は訊いた。

脳裡に、野上高明の相貌がかかっていた。東北六県潰滅の中にあつて、ただ一人、瘦身を吹き荒ぶ荒涼の風に立てている野上の姿が。

野上の胸中を思った。

はたして、野上高明は天下動乱をその双眸に秘めているのか。

野上高明は飛蝗禍と同時に、数多くのことを読み取つた。政府の援助が東北六県一千万人の食糧を補えないであろうことは、中央政界の重鎮であつた野上には、わかる。東北六県一千万人を救済に出れば、国家経済が破綻する。大恐慌が荒ぶことは承知している。

野上は可能なかぎり、手を打つた。三井商事社長の平田禎三を説得し、平田は傘下の各商社に檄をとばして保存食糧の買出し動に乗り出した。

動乱を見越して東北地方守備隊を創設し、騒ぎを抑え、政府管掌備蓄米の東北持ち出しを實力で封じた。

それらの洞察力はビタリ、ビタリ、ツボを押えていた。野上高明がいなければ、東北六県は無秩序、無法の世界に堕ちていた。一県千二、三百人の県警勢力は無きにひとしい。東北地方守備隊がかううじて、崩壊を支えている現状だった。

最終的に、政府は六千億円の投入を決議した。その額

も、野上高明は九分九厘、読んでいたにちがいない。現実には東北六県は捨てられることを。

その野上高明を、アメリカ大統領補佐官のウィクター・ミッチェルが極秘裡に訪ね、会見している。ウィクター・ミッチェルは何かを野上の動きから察した。そのミッチェルの報告で、ホワイトハウスは硬軟両様の作戦に出た。一つは、野上高明を世界勢力の均衡を崩す危険人物とみての、暗殺指令。

一つは、野上高明への援助。

野上高明への援助を密約したところをみれば、ホワイトハウスは野上を尋常一様ならざる人物とみている。日本の国家権力をもつてしても抑え込めないおそれがある。

曲垣は悔いた。畦倉が故意に情報を握りつぶしていたためでもあるが、足もとまで迫っている動乱の風を察知できなかった自分が、慙愧に耐えなかった。

曲垣は、死の臭いを嗅いだ。

野上高明の死臭であった。

「緊急事態宣言を留保して、ここに、わたしはある指令を出さざるを得ない」

畦倉の小柄な体が、曲垣にはそのとき、ふっと大きくみえた。裡に謀略を秘めた老獪な政治家の真骨頂が、い

ま、畦倉を大きくみせたのだった。

「東畑君」畦倉は警察庁長官をみた。「明日、東北地方守備隊が白河に布陣する。これを、潰したまえ」

「潰す？」

「そうだ、いかなる謀略を用いようと、かまわぬ。かれらに、法を犯させるのだ。この意味がわかるかな」

「ええ」

東畑は青ざめた顔でうなずいた。

「野上高明を、つぶすのだ。わたしは、野上であれ、だれであれ、一地方自治体の叛逆は、叩きつぶす。野上は、このわたしが憲法だといった。よいかな、一つの国に二つの憲法は、必要ではない」

畦倉の皺ひだに包まれた双眸が、重い光を放っていた。

「わかりました」

「この国家安全保障会議は、法律で極秘を規定されている。それを忘れないように。なお、戦うべき相手が存在する間は、わたしは、何回でも招集するつもりだ」

刺すような目で、畦倉は一同をみた。

3

九月二十八日、午後四時。

警視庁、神奈川県警、栃木県警、群馬県警、茨城県警、福島県警に動員令が出た。奥州白河のある福島県と、隣接する栃木県の両公安委員がそれぞれの警察に出動要請をだしたのであった。

都道府県警察は当該県公安委員会の要請がなければ、越境出動はできない。

福島、栃木両県公安委員会の要請は、国家公安委員会からの指令に従ったものであった。

五県警からは三百人ずつの警官が出動した。

警視庁からは五百人の機動隊が派遣された。

青森県五所川原農協倉庫に出動し、東北地方守備隊殲滅を計った第四機動隊であった。そのときの惨敗の復讐に燃えている。全員が第一級出動装備をととのえて、東京を出た。

福島・栃木県境に到着したのは、二十九日午前十時過ぎであった。

合計二千人の混成警官隊は県境の黒川河原に陣を布いた。

黒川は那珂川の支流であった。日光国立公園の三本槍岳から流れ出ている。

曇り日であった。

風が冷たかった。

刑部保行の先導する東北地方守備隊が白河市に到着したのは、正午過ぎであった。

強行軍であった。午前六時に盛岡を出発して、六時間すこして白河市到着であった。

白河市には止まらなかった。そのまま進んで県境の黒川河原に出る予定だった。食糧等の補給部隊も同行している。

刑部は白河市から野上高明に電話を入れた。

「ご苦労」

野上の低い声が受話器に流れた。

「県境に布陣せよ。黒川河畔に福島、栃木の両県警が東京、神奈川県、群馬、茨城から応援を求めて約二千人で布陣しておる。対峙せよ」

「わかりました。しかし、対峙して、それからどうすればよいのですか」

「臨機応変だ。処置は、きみに一任する。なお、そのつぎに取る行動は、こちらから伝達する」

「わかりました」

刑部は電話を切った。

ジープに戻った。

「命令は？」